朝ドラ牧野富太郎に沸く高知

来年春から放送されるNHK連続テレビ小説の主人公モデルに、高知県出身の世界的植物学者・牧野富太郎が選ばれた。この朗報に高知県が沸いている。

高知が「朝ドラ」の舞台となるのは、安芸市などでロケを行った１９８８（昭和６３）年の「ノンちゃんの夢」（藤田朋子さん主演）以来のことになる。しかし県民にとって記憶に新しいのは、坂本龍馬を取り上げたＮＨＫ大河ドラマ「龍馬伝」（２０１０年放送）のほうだろう。福山雅治さんの主演ということも相まって、その影響力と観光波及効果をまざまざと思い知らされた。

高知県庁にも「龍馬伝」当時のノウハウが蓄積もされており、いま観光部局を中心に「朝ドラ」を生かした「大型観光キャンペーン」を展開するための官民挙げた組織づくりを急いでいる。

「牧野富太郎」の知名度は「坂本龍馬」に遠く及ばないであろう。しかし、だからこそ、この機会は高知県に新たな価値を創出することになる。日本の「近代植物学の父」である牧野博士には、痛快なエピソードや苦労話もあふれ、ドラマの素材としても申し分ない。そして最も大切なことは牧野博士を通じて改めて実感できるであろう高知県の植物の豊かさ、いや日本という国の自然の素晴らしさだ。

「牧野富太郎」の向こうには「自然」があるのである。

そういう意味では「龍馬伝」が発するメッセージよりも、より普遍性と現代性を兼ね備えているのではないか。人々の豊かさというものを金銭の多寡で測るという時代は終わった。「金融資本」には乏しい高知県かもしれないが、私たちには豊かな「自然資本」がある。

牧野博士を演じることになる俳優・神木隆之介さんの人気は高い。彼の演技は素晴らしく、より博士を魅力的なものにするだろう。きっと朝ドラはヒットする。もうすでに牧野博士ゆかりである高知県立牧野植物園には「朝ドラ効果」が見え始めている。来春から放送が始まれば、それをきっかけとして高知県を訪れる人も増えるのは間違いない。

しかし「朝ドラ」は来年秋に終わる。単なる「大型観光キャンペーン」にしてはならない。その宴のあとに、私たちは一体何を未来に残せるか。問われている。

高知新聞社　メディア企画部副部長　竹内　一

牧野富太郎博士をモデルにした朝ドラが来年春から放送されることになり、早くも入園者が増えている高知県立牧野植物園（高知県高知市の五台山）

２０２２年４月２４日は牧野博士の生誕１６０年。高知新聞社は当日朝刊を博士が採取した桜の植物標本で本紙を包み込む「ラッピング」を施した